企画・制作　読売新聞社広告局　広告

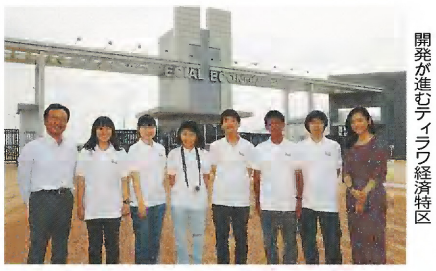
高校生が肌で感じた地元密着の熱い想い

三菱商事の海外ビジネス最前線を高校生が訪問・取材してリポートするシリーズ企画「海外プロジェクト探検隊」。14回目を迎えた今回は、7月31日から8月5日まで実施され、首都圏と大阪府在住の高校生6人が参加した。軍政から民政への移行に伴い経済成長の著しいミャンマーで、三菱商事はどのようなビジネスを展開し、国の発展と成長を支えているのか。探検隊一行は最大都市ヤンゴンと、第二の商業都市マンダレーに飛び、三菱商事が2事業経営しているティラワ経済特別区や、マンダレー国際空港などを巡った。

ティラワ経済特区の工業団地
「インフラ整備、日本ならでは」

成田から直行便で約7時間。到着したヤンゴンは、ミャンマー南部に位置する都市だ。雨の多い雨期とあって、湿度は高く蒸し暑い。ヤンゴンの中心部からバスで南東に約1時間。田畑が点在するデルタ地帯のデコボコ道の向こうに、整然と区画された近代的な工業団地が見えてきた。ミャンマーと日本が官民を挙げて共同開発を進めるティラワ経済特区の工業団地だ。全体で2400㌶（東京ドーム約500個分）を整備する予定で、現在は405㌶の「ゾーンA」が開業している。

高校生たちは「ゾーンA」の内部を視察した。道中とうって変わって、道路は滑らかに舗装されている。食品や下着のメーカーなど馴染み深い日本企業の名前を冠した工場が、次々と目に飛び込んできた。「まるで日本にいるみたい」。高校生たちは意外な光景に目を見張った。ゾーンAに工場等を建てる契約を結んだ約80社のうち、ほぼ半数は日系企業だ。ほかにも隣国のタイ、台湾、韓国、シンガポールなど、アジアを中心に17か国の企業が進出している。ASEAN（東南アジア諸国連合）の中でも人件費が安いミャンマーでは、人手がかかる製造業の進出が加速しているという。現地を案内してくれたのは、工業団地の開発・運営主体である「ミャンマー・ジャパン・ティラワ・デベロップメント」（以下MJTD）の下山洋一副社長だ。三菱商事は同社に出資し、三菱商事ヤンゴン駐在事務所の副所長も兼ねる下山さんが経営に参画している。「私たちは企業を誘致して利益を上げ、誘致した企業は仕事と雇用を生んでミャンマーを潤している」という下山さんの説明に、一行はうなずいた。


開発が進むティラワ経済特区

高校生たちが特に強い関心を示したのは、ティラワ経済特区の工業団地には、発電所のほか上下水処理施設も完備されているという事実だった。ミャンマーではインフラ（社会基盤）の整備が経済発展に全く追いついていない。工業団地では地下水の汲み放題や汚水の垂れ流しが一般的で、水処理施設が整っているのは珍しいことだという。「日本は近代化の過程で公害にも苦しみ、環境に関するいろいろなルールを整えて今の日本になった。ミャンマーはまだルール作りの途中だが、日本の技術やノウハウを伝えていきたい」。下山副社長の思いを聞いた渡辺星之進さん（千葉県立千葉高校）は「公害などの問題を克服してきた日本ならではの視点だと感じた。ビジネスを通して社会に良い影響を与えられるのは素晴らしいことだと思う」と誇らしげな表情を見せた。

コーヒー市場のトップシェア企業
「現地の人との信頼関係、印象的」

一行は次に、製粉事業やコーヒー事業を手がける食品製造販売会社「ルビア・リミテッド」（以下ルビア）を訪れた。食べ盛りの高校生たちはミャンマーの食事情にも興味津々。さっそく、ミャンマーのインスタントコーヒー市場で3割を超えるトップシェア（占有率）を誇る、ルビアの「プレミア」ブランドのコーヒーを試飲した。一口飲むと、高校生たちは予想外の甘さに驚き、目を見合わせた。それもそのはず、ミャンマーではたっぷりの砂糖とミルク、コーヒーをあらかじめ混ぜ合わせたインスタントコーヒーが主流なのだ。

ルビアの営業を取材する高校生

トップシェアの秘密を探るべく、三菱商事からルビアに出向している村上源ディレクターとともに、「プレミア　コーヒー」の営業に同行した。2人1組の社員が商品を積んだトラックを運転し、ヤンゴン市内の昔ながらの個人商店へと向かう。ミャンマーには「伝統小売」と呼ばれるこうした個人商店が15万～20万店もあると言われており、ルビアの営業スタッフは1日に40軒ほど店を回る。商品を卸し、店の目立つ場所に置いてもらうのが仕事だ。村上さんは「コーヒーは嗜好品なので、どの店でも消費者が商品を目にするようにして衝動買いを誘うことが大切」と教えてくれた。流暢な英語と仕事への情熱を兼ね備えた村上さんは、行く先々で店主らと笑顔で言葉を交わし、現地に溶け込んでいる様子だ。その言葉通り、小さな個人商店にも大きなスーパーにもコンビニエンスストアにも、「プレミアコーヒー」は並んでいた。

一行はルビアのインスタントコーヒー工場も訪れた。消費の増加などを背景に、直近の3年間で生産量は約3倍に伸び、年間約20億袋（杯）を生産しているという。フル稼働の工場で高校生たちが目にしたのは、性能が大きく異なる3種類の生産ラインだった。2014年に導入した旧式のラインは手作業を要する工程も多い一方、16年に導入したラインは新式の機械を使っており、より少ない人手で同量の商品を作れる。急ピッチで進む設備投資のたびに、より高性能なラインを導入してきた結果だ。竹田圭佑さん（横浜市立南高校）は「ひとつの工場の中に、昭和から平成までの異なる時代が共存しているかのような不思議な光景だった。走りながらどんどん進化している。ミャンマーの成長の速さを実感した」と振り返った。

村上さんは道中で高校生たちに夢を語ってくれた。将来的には、ミャンマーの農産物を使い、ミャンマーで作った食品で、ミャンマーのスーパーの棚をいっぱいにしたいという。「とても気の長い話で、数年で実現できることではない。それでも、同じ想いを持った三菱商事やルビアの人たちが、10年、20年と仕事を続けていくことで実現し、国民全体の生活を豊かにしていくことができる」。その熱い想いにふれた岡田真一さん（大阪府立茨木高校）は、「村上さんたちが長期的なミャンマーの発展を見据えて、現地の人たちと信頼関係を築きながら仕事をしている姿が印象的だった」と話した。

トップシェアの秘密を探るべく、三菱商事からルビアに出向している村上源ディレクターとともに、「プレミア　コーヒー」の営業に同行した。2人1組の社員が商品を積んだトラックを運転し、ヤンゴン市内の昔ながらの個人商店へと向かう。ミャンマーには「伝統小売」と呼ばれるこうした個人商店が15万～20万店もあると言われており、ルビアの営業スタッフは1日に40軒ほど店を回る。商品を卸し、店の目立つ場所に置いてもらうのが仕事だ。村上さんは「コーヒーは嗜好品なので、どの店でも消費者が商品を目にするようにして衝動買いを誘うことが大切」と教えてくれた。流暢な英語と仕事への情熱を兼ね備えた村上さんは、行く先々で店主らと笑顔で言葉を交わし、現地に溶け込んでいる様子だ。その言葉通り、小さな個人商店にも大きなスーパーにもコンビニエンスストアにも、「プレミアコーヒー」は並んでいた。

一行はルビアのインスタントコーヒー工場も訪れた。消費の増加などを背景に、直近の3年間で生産量は約3倍に伸び、年間約20億袋（杯）を生産しているという。フル稼働の工場で高校生たちが目にしたのは、性能が大きく異なる3種類の生産ラインだった。2014年に導入した旧式のラインは手作業を要する工程も多い一方、16年に導入したラインは新式の機械を使っており、より少ない人手で同量の商品を作れる。急ピッチで進む設備投資のたびに、より高性能なラインを導入してきた結果だ。竹田圭佑さん（横浜市立南高校）は「ひとつの工場の中に、昭和から平成までの異なる時代が共存しているかのような不思議な光景だった。走りながらどんどん進化している。ミャンマーの成長の速さを実感した」と振り返った。

村上さんは道中で高校生たちに夢を語ってくれた。将来的には、ミャンマーの農産物を使い、ミャンマーで作った食品で、ミャンマーのスーパーの棚をいっぱいにしたいという。「とても気の長い話で、数年で実現できることではない。それでも、同じ想いを持った三菱商事やルビアの人たちが、10年、20年と仕事を続けていくことで実現し、国民全体の生活を豊かにしていくことができる」。その熱い想いにふれた岡田真一さん（大阪府立茨木高校）は、「村上さんたちが長期的なミャンマーの発展を見据えて、現地の人たちと信頼関係を築きながら仕事をしている姿が印象的だった」と話した。

事業経営　事業に投資するだけでなく、三菱商事社員が投資先に出向し、経営に深く入り込むことで、投資先企業の成長を加速させていくこと。三菱商事の持つ経営インフラを活用し、投資先企業が抱える経営課題を把握し解決することで、双方の企業価値向上を目指す。

日本式導入するマンダレー国際空港
「もてなしの心や緻密さ、実感」

ミャンマーの国土は日本の約1・8倍と広い。ツアー4日目、一行はミャンマー中部にある第二の商業都市マンダレーへ飛んだ。ヤンゴンからの距離は約600㌔。鉄道なら15時間はかかるという移動時間は、飛行機ではわずか1時間だった。到着したのは2015年に民営化されたマンダレー国際空港だ。以前はミャンマー政府が運営していたが、三菱商事などが合弁で設立した「MC-Jalux Airport Services」（以下、MJAS）が30年間の事業権を取得し、運営している。日本企業が海外で100％民間資本で取り組む初の空港運営民営化プロジェクトとして注目を集めている。

空港内を歩くと、洒落た飲食店や土産物屋が並び、制服姿のスタッフがきびきびと笑顔で接してくれる。約4200㍍あるという滑走路は端がかすんで見えないほど長く、特別に間近で滑走路を視察した高校生たちはスケールの大きさに圧倒された。搭乗手続きなども滞りなく行われており、日本の快適な空港に来たような印象を受ける。しかし、民営化される前は、トイレの水も流れず、エスカレーターや手荷物を運ぶベルトコンベヤーも止まり、「汚くてメンテナンスが行き届いていない空港だった」（廣井太・MJAS副社長）という。

マンダレー国際空港で廣井太MJAS副社長（右から4人目）の説明を聞く高校生

空港運営を抜本的に立て直すために三菱商事から出向している廣井副社長らは、日本式のノウハウを矢継ぎ早に導入してきた。羽田空港から清掃のプロを招いて研修を行い、出発する飛行機をスタッフがお辞儀をして見送るトレーニングも実施した。高校生たちが見学した「モーニングブリーフィング」もその一環で、各部門の責任者が毎朝定刻に集まり、打ち合わせをしている。サービスを向上させるため、新たに約300人の雇用も生み出した。

民政への移行に伴う往来の増加に加え、改善の積み重ねによって、同空港の旅客数は2016年度は11年度比で2・2倍の117万人に急増した。売上高は民営化前の3倍以上に増えたという。今後は貨物ターミナルも開業し、「航空便で貨物も運べる態勢を整えて、マンダレー名産のマンゴーの輸出などにもつなげていきたい」（廣井副社長）という。マンダレーでの空港運営の成功は、将来的にアジアでナンバーワンの空港事業者を目指す三菱商事にとって、大きな一歩となる。野平遥紀さん（埼玉県立川越女子高校）は「日本人の緻密さや柔軟性、おもてなしの心が感じられた。日本式の空港運営は世界で戦えるビジネスになると思う」と笑顔を見せた。

CSRの一環、支援の農業研修施設
「国の将来思う同世代に感動」

アジアを中心に農業研修などを行っているNGO「オイスカ」は今夏、三菱商事の支援で、降水量の少ないマンダレーに「ミャンマー農業指導者研修センター」を開設した。22人の若者が寝食を共にしながら、有機農業や農機具の活用法などについて実習を中心に学んでいる。センターを訪れた高校生たちは研修生の手料理を味わいながら彼らと意見交換し、田植えも体験した。「付加価値の高い農産物を作る技術を身につけて、村に帰ったらみんなに伝えたい」「農村の人手不足が深刻なので稲作の機械化を進めたい」「マンゴーなどの高品質な果物を作れるようになって、村のみんなを豊かにしたい」。村のために役に立ちたいという願いを口々に語る研修生たち。大滝梨乃さん（渋谷教育学園渋谷高校）は「自分といて年の変わらない研修生たちが広い視野を持ち、村や国の将来を考えて学んでいることに感動した。果物などをマンダレー国際空港から輸出できるようになれば、空港もますます発展すると思う」と語った。

研修生の指導を受けながら田植えを体験

一行は、日本発祥の国際医療NGO「ジャパンハート」がヤンゴンで運営している養育施設「ドリームトレイン」も訪れ、練習を重ねた日本の歌謡曲を披露したり、ミャンマー語に翻訳した日本の絵本を贈るなどして子どもたちと交流した。ドリームトレインでは子どもたちが自ら生計を立てられるようになるまで、責任を持って養育しているという。安藤奈々さん（成蹊高校）は「子どもたちが元気に成長して、未来のミャンマーを背負っていくことを願いたい」と話した。

黄金に輝く仏塔、シュエダゴン・パゴダの境内では、三菱商事が寄付した三菱電機製のエレベーターに乗り、三菱商事がミャンマーの文化を支える手伝いをしていることを知った。安藤さんは「国民の約9割が仏教徒というミャンマーで聖地を支援することが、仕事を進める上で大切な相互理解や信頼感の醸成につながっているのだと思う」と話し、ビジネスとCSRの関連性について考える貴重な機会となった。

＊成長の息吹 実感

今回のツアーで、高校生たちはミャンマーの経済発展の勢いを実感した。車の需要増に伴い、ヤンゴン市内の道路は日本の中古車であふれていた。電気も水道も通っていない農村で、若者がスマートフォンを操作する姿もよく見かけた。三菱商事の真野英俊ミャンマー副総代表は「今はちょうど50年前の日本と同程度の1人あたりGDP（国内総生産）だが、急速に成長しており、これからも間違いなく発展していく国のひとつ」と教えてくれた。野平さんは「私たちが訪れた今夏のミャンマーは、きっと10年後には姿を消し、過去のものになっているだろう。この国のこれからを、必ずまたミャンマーに来てこの目で見たいと思った」と振り返った。

海外プロジェクト探検隊　三菱商事のビジネス現場へ、国際交流も

読売新聞社が教育ネットワークの参加校の中から日本の高校生を「記者」として選抜して海外へ派遣、現地取材や体験の内容を高校生に読売新聞や読売中高生新聞紙上などで発信してもらうシリーズ企画。三菱商事が手がけるビジネス現場を訪問するほか、現地の人々との国際交流や社会、文化を学ぶプログラムを通じて、ビジネスへの理解を深め、外国文化への関心を高めてもらうのが目的だ。国際社会で活躍する人材育成に寄与することを目指している。これまでに訪問したのは、中国、タイ、インドネシア、オーストラリア、米国など11か国。

海外プロジェクト探検隊
～世界の仕事現場を見に行こう!～
第14回　ミャンマー

ヤンゴンの街角を行く今回の参加メンバー。（左から）横浜市立南高等学校2年・竹田圭佑さん、埼玉県立川越女子高等学校2年・野平遥紀さん、大阪府立茨木高等学校2年・岡田真一さん、渋谷教育学園渋谷高等学校2年・大滝梨乃さん、千葉県立千葉高等学校2年・渡辺星之進さん、成蹊高等学校2年・安藤奈々さん

※第14回「海外プロジェクト探検隊」の様子は、明日（10月20日）発行の読売中高生新聞でも紹介します。

主催：読売新聞社　特別協賛：三菱商事　後援：駐日ミャンマー連邦共和国大使館